

期末評価	
○ 成果と▽ 課題	● ▼ 次年度への方策等
○調べたことや学習したことをまとめたり発表する力が身についたと感じた生徒が81.9%（前年比+3.2%）いることは成果としてあげられる。 ○生徒が安心して学習に取り組める環境であると感じた生徒が83.2%（前年比0%）いることは成果でもあるが、今後はhyperQU等を利用して個々の生徒理解を深める。 ▽先生の授業は分かりやすいと感じた生徒は79.2%（前年比-4.1%）いることは、課題として学校評価等を利用して授業改善する。	●ドリルパークを月曜日と水曜日の朝、各自の課題に基づいて行っている。この学習状況を各教科で確認し、弱点分野を授業の中で補充していく。 ●定期考査の学習計画を立てることにより自分で計画を立てて主体的に学習に取り組む力を身に付ける。 ▼ディスプレイ型電子黒板の活用方法を研究し、生徒によりわかりやすい授業を行う。

期末評価	
○ 成果と▽ 課題	● ▼ 次年度への方策等
【国語】 ○「相手に伝わるように言葉の使い方を工夫している（語彙）」「友人の意見から、新しい考え方を模ととしてしている（共有）」の質問に肯定的に答えた生徒が8割を超えており、日常の授業形態の工夫の成果が見て取れる。 ○新宿区学力調査において言語事項（漢字、文法、敬語等）については、全国・区平均を上回っており、授業や自宅学習の継続した成果が見て取れる。 ▽「自分の文章の表現や構成を振り返っている（推敲）」の質問において否定的に回答した生徒が、他の質問よりも多く、日常の評価とあわせても、作文活動や論理的な思考への苦手意識の強い生徒が三分の一程度いることが分かる。	●日常の授業形態の工夫については、学習効果が出ているため、学習指導要領のねらいに基づさらに主体的・協働的な活動を向上、継続して行っていく。 ●言語項目に関しては、授業の内外を問わず習慣的な学習が必要であるので、授業での継続的な指導と生徒の多様な家庭学習に合わせて、課題の出し方やドリルパークの活用を続けていく。特に漢字の書き取りについては、苦手と感じる生徒が増加傾向にあるため、重点項目として計画していく。 ▼作文への抵抗感を下げるために、短文作成や文字数の少ない作文を日常的に行っていくように授業計画を行うとともに、接続語の活用や段落構成など観点を絞って、書き方の指導も行っていくように計画する。
【数学】 ○授業アンケートへの肯定的な回答が「少人数指導のレベルは自分にあっている」に対して8割、「質問への対応は丁寧である」に対して9割、「少人数指導は発言しやすい」に対して8割に上り、習熟度別指導のクラス編成は、生徒の実態に即して効果的に行えていると考えられる。 ○新宿区学力調査の結果を見ると、平均正答率はすべての単元で全国平均を上回ることができた。 ▽新宿区学力調査の結果から1・2年生において、A層とD層の生徒の正答率の差がどの学年・どの単元・領域においても5割を上回っている。	●習熟度別指導は、生徒の学習意欲の向上、基礎学力の定着に効果が出ていると考えられる。今後も単元ごとの再編成を行うなど、今までの取り組みを継続させるとともに、主体的・協働的な活動の充実を図っていく。 ▼A層とD層の生徒の正答率の差が5割を下回るよう、少人数指導の充実を図る。特に、D層の生徒の正答率の向上を図るため、ドリルパークの活用など反復学習の機会を増やす。
【理科】 ○授業アンケートにおいて、第1学年では「どうやって問題を解決したら良いか」と見通しを持って取り組もうとしている。」第2学年では「学習の成果や今後の課題を振り返って明らかにしている。」の項目が80%であった。 ○新宿区学力調査において、観点別では第1学年において「思考・判断・表現」が全国・区の平均を上回った。 ▽第2学年では「知識・技能」「思考・判断・表現」の各項目で全国・区平均と比較して低い結果になっている。 ▽2学年における知識・技能のD層が38.1%をしめている。	●実験への取組の中で「目的」を明確化し、考察の記述から思考や表現力を高める指導を継続的にを行い「主体的に学習に取り組む態度」の育成を図り課題の解決方法や課題への取り組みを行っていく。 ●ICT機器を用い抽象的な内容の理解促進を図る。 ▼実験を行う際の目的や実験について自ら考え考察する姿勢が不足している傾向がある。目的の明確化させ実験などに取り組ませていく。 ▼知識の定着を図るために授業内において前時の内容を復習する時間を継続的に設けるとともに家庭学習の充実を図っていく。 ▼2学年における知識・技能のD層が38.1%をしめ基本

	的な知識の定着が図られていない生徒が多いことが考えられる。授業内容を明確化させドリルパーク等を用いて家庭学習の機会を増やし知識の定着を図っていく。
【社会】 ○新宿区学力定着度調査において、1年生2年生ともに「知識・技能」「思考・判断・表現」の項目において、平均を上回っていた。また、2年生は昨年度に比べて、A層が多くなり（18.8%→37.7%）、D層が少なくなった（27.5%→21.5%）。 ▽複数の資料を関連させて考える問いは正答率が低い傾向にある ○▽単純な知識を問われ単語を答える問題については1年生2年生ともに正答率が高い傾向にあるが、記述式の問題では正答率が下がる傾向にある。	●反復的な知識の確認を増やしたところ、2年生においてはA層が増えD層が減る結果となっているため、今後も継続して基本的な知識の定着を図る反復した復習を行っていく。 ▼複数資料の読み込みに関わる力をつけるために、授業内で積極的に資料の関連のさせ方・読み込み方の定着を図っていく。 ▼考えを文章にする発問を積極的に授業で取り扱うとともに、望ましい答え方や文章の作り方が身につくように添削を行っていく。 ●ドリルパークやワークを用いて、単元ごとの復習の機会が得られるようにするとともに、家庭での学習の習慣化を図れるようにする。
【英語】 ○A L Tが多くの授業に来ているため、「聞くこと」や「話すこと」についての活動を多く取り入れることができた。そのために、今年度からE S A T-Jは全学年で実施となったが、どの学年でも意欲的に取り組むことができた。3年生の結果でスコアがA、Bだった生徒の割合は7割を超えることができた。 ○生徒用デジタル教科書を全学年で導入し、Teamsでの音読テストやパフォーマンステストに活用できた。また課題をワードやパワーポイントで生徒へ出すことによって、スカイメニューで回収することもできた。I C T機器を活用できた。 ○授業の内容をある程度パターン化することによって、生徒が先の見通せる授業を組み立てることができるようになってきた。 ○▽新宿区学力定着度調査の結果を見ると、平均正答率が全国平均と比べてほとんどの項目で大きく上回っているが、区平均を下回っている項目が多い学年もある。全国調査の結果を分析して、今まで以上に効果のある授業内容の検討、工夫が必要である。	●A L Tの活動をさらに学習効果が出るように、実際の場面に即した内容と即興性を併せもった活動になるようにする。授業で学んだ文法と新しく学ぶ文法を取り入れたものも考えていく。 ●I C T機器の効果的な使用方法を英語科教員で研究、共有して授業で取り入れられるようにする。特にデジタル教科書を家庭学習で効果的に使用できるような方法を考えていく。 ▼「読むこと」が区平均と差が大きいので、毎回の授業の中で、読み取りの問題に多く取り組むことと、単語テストなどで基礎力の向上を図っていく。